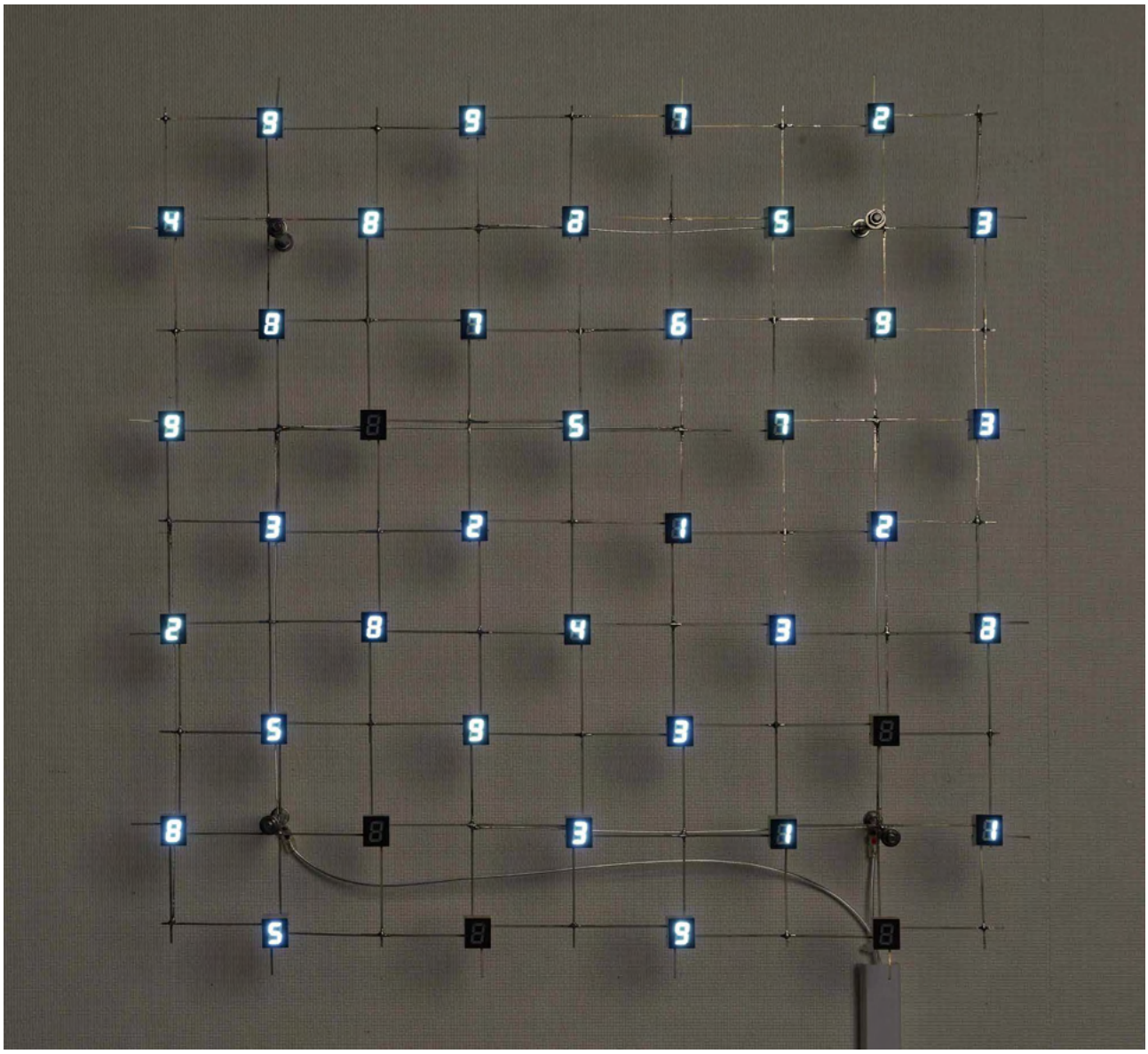
アマリリス
Amaryllis
静岡県立美術館ニュース
THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



宮島達男（一九五七―／昭和三二―）
《C.F. Lifestructurism-no.13》
二〇〇九（平成二一）年
LED、IC、電線、金具
四四・五×四四・五×六・五㎝
太田正樹氏寄贈

宮島達男の作品は、これまで太田正樹氏より二点ご寄贈いただいていたが、この度、さらに一一点ご寄贈いただいたことで、宮島の各時代の作品が揃うことになった。本作は新たにコレクションに加わったもので、「カウンターフラジャイル」（Counter Fragile）シリーズのうちの一点である。あえて細い金属の構造や小さいデジタルカウンターを採用することで、タイトルが示すように、本作は壊れやすく、はかないように見える。人間は六〇兆個もの細胞からなると言われるが、本作もまた小さなデジタルカウンターが複数集まって構成され、それぞれが九から一までのカウントダウンを繰り返している。小さい光ではあるが、それぞれが時を刻んで変化して続けている様は、すでに所蔵している大作とは違った鑑賞体験を与えてくれるだろう。

（上席学芸員　植松　篤）

No.
149
2023年度｜春｜

篤志家太田正樹さんのこと

館長　木下 直之

当館に一〇六点の美術作品をご寄贈くださった太田正樹さんについては、生前にお目にかかる機会がなかったため（それにもかかわらず、館員同士で親しみをこめて「太田さん」と呼ぶことが普通でした）、この世に遺されたものとその志を通してお話するほかありません。

六年前に館長として当館に着任して以来、太田さんのお名前を聞かない年はありませんでした。ある時は作品の寄贈を受け、またある時はすでに寄贈されていた作品を展示室で目にして、という具合に。

「いったいどんな方なの」と担当の学芸員に尋ねても、詳しい答えは返って来ません。大学の先生だったとか、現代美術がお好きだっただとか、その程度の話にとどまり、肝心の人物像はヴェールに包まれたままでした。匿名ではないにせよ、名前以外はぼんやりとした姿の方から毎年届けられるプレゼントなのだと、そのご好意を受け止めてまいりました。担当学芸員でさえ、亡くなって初めて、詳しい経歴を知ったということです。

航空経済学がご専門でした。『航空輸送の経済学』、『各国における空港制度』、『航空と空港―その経済的研究』など著書のタイトルを書き上げれば、太田さんの関心がどこに向けられていたかが分かります。一九三三年に清水市（現在は静岡市）に生まれ、早稲田大学商学部に学び、大学院修了後も一貫して同大学で教鞭を執り、二〇〇四年の退職を機に帰郷されました。

間もなく太田さんからコレクションを見て欲しいという連絡が当館に入り、展覧会への出品、寄贈、と階段を上るように関係が深まりました。昨年の夏にご逝去されたため、今回が最後の寄贈となってしまいましたが、それらも生前からの明確な意思に基づくものでした。

一〇〇点を超える太田正樹コレクションの評価は川谷承子学芸員の別稿に譲り、ここでは、太田さんと美術館の関係についてもう少し踏み込んでみたいと思います。

コレクションとは、個人が好きなもの、気になって仕方がないもの、手もとに置かずにはいられないものを集めることであり、この本質は美術品に限らない。太田さんのコレクションもそのように始まったはずです。ところが当館との関係が築かれた後は、当館が必要なもの（と太田さんが考えるもの）を学芸員と相談しながら購入し、そのまま寄贈くださるようになりました。

美術館コレクションを補う、その弱点を補強するという姿勢が稀有でした。このように美術館を支えるという考え方を太田さんがいつ持つことになったのか、ドイツ留学時の美術館体験がきっかけになったと耳にしましたが、詳しくお尋ねする機会は永遠に失われてしまいました。

ひるがえって、個人コレクションに始まる私立美術館ではなく、当館のような公立美術館のコレクションは誰の意志に基づいて形成されるのか、されるべきなのかという問題が突きつけられたように思います。

実は、このことは、昨秋に開かれた「みる誕生―鴻池朋子展」でも問われました。鴻池さんが当館のコレクションを引き出し、自分の作品と並べて展示したからです。それは一種の点検でした。

私は、同展記録集（本年三月刊行）に「鴻池朋子さんとの対話を振り返って」と題して「美術館は建物でも人でもなくコレクションだという言い方があり、美術館の存在意義を説く際に、私もそれをしばしば口にしてきた。その時々の基準による（実際にはその時々の学芸員の判断による）選別が行われる。しかし、絶対不変の価値などないのだから（多くの人はあると信じているかもしれない）、不断の検証が求められるべきだ」と書きました。

当館のコレクションは、「風景」をテーマに、四〇年余りの時間をかけて作られてきました。収集の指針はある、それに従った時々の判断もある、しかし、最終的な完成形があるのではない。つねに成長を重ねてきたという表現がしっくりきます。太田正樹さんは、コレクションの成長を見守るというよりも、一歩踏み込んで、自ら育ててくださった方でした。

センス・オブ・ワンダー：感覚で味わう美術

2023年４月18日（火）～７月９日（日）

一七世紀以降の東西の山水・風景画、静岡県ゆかりの作家・作品、現代の美術、ロダンと近代の彫刻、そして富士山の絵画。二八〇〇点以上にのぼる静岡県立美術館のコレクションは、手前味噌で恐縮ですが、実にヴァリエーションに富んでいます。通常、展覧会では、これらの作品を、作風や様式、時代や国、または主題などに分類してお目にかけることがほとんどです。しかし、この展覧会では、「感覚」をテーマに、ひとあじ違うアプローチを試みます。すなわち、コンセプトは五感による作品鑑賞の楽しみ。多くの芸術作品は視覚による鑑賞を基本とします。本展では、視覚以外の感覚器官（触れる、聴く、匂いを嗅ぐ、味わう）に直接働きかけたり、また過去に経験した感覚の記憶を呼び覚ますことや、未経験の事柄を五感で想像することによって、作品の素材、モティーフや主題をより深く味わう鑑賞へと誘います。

草間彌生の《水上の蛍》は、五感を刺激する、まさしく本展を象徴する作品です。四角い建物の扉を開け、両脇に水をめぐらした通路を進むと目に飛び込んでくるのは、闇にきらめく無数の光。様々に彩られた電飾の光の渦が天井の鏡や周囲の水に映るさまは、その名のとおり、水面を飛び交う蛍のようです。この作品を鑑賞できるのは、一度にひとりだけです。どのような世界が見え、何の音が聴こえ、どのような醍醐味を味わえるのか。当館で本作をご紹介するのは、実に九年ぶりとなります。

このほか、主に立体作品をご紹介する展示室では、これらの素材や、作品のレプリカに触れるコーナーを設けます。本物の作品に触っていただくことはできませんが、素材の手触りによって作品の質感を想像したり、レプリカに触って彫刻の形を確認することができます。また、楽器を演奏する人物や都市のざわめきが感じられる絵画、あるいは川のせせらぎや風の音など、四季折々の自然を表した風景画から、音や匂いの記憶をたどるとともに、描かれたまだ見ぬ世界を想像することができるのではないでしょうか。さらに、「味覚」に関連する展示室では、宗教的・寓意的な意味を込めた作品を含め、自然の豊かな実りや人と食にまつわるエピソード、食への根源的欲求を描いた作品を紹介するとともに、様々な作家による静物画を展示します。

オーギュスト・ロダン《考える人》（小型）

作家で海洋生物学者のレイチェル・カーソンは、「センス・オブ・ワンダー（＝神秘さや不思議さに目を見はる感性）」によって自然を発見する喜びを、同名のベストセラーで綴りました。インターネットとデジタルメディアの普及により、気軽かつ身近に芸術体験ができるようになった今日、本展は逆に、人間がもつ感覚によって、静岡県立美術館の多様性に富むコレクションを、楽しみながら現実（リアル）に感じていただくことを目指します。一七世紀のクロード・ロランやジャック・カロから、現代の草間彌生や名和晃平まで、これまであまりご披露する機会のなかった作品も含め、「五感の冒険」をキーワードに約九〇点の絵画・立体・版画等で構成する本展を、どうぞお楽しみください。

（上席学芸員　南　美幸）

＊会期中、一部展示替えがあります。

＊二〇二一年　レイチェル・カーソン著、上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社（新潮文庫）を参照しました。

草間彌生《水上の蛍》　©YAYOI KUSAMA

※画像の無断転載禁止

新収蔵品の紹介

当館では開館以来、一七世紀以降の東西の風景画、静岡県ゆかりの作品、国内外の現代美術などの収集方針に基づき、コレクションを拡充してまいりました。二〇二二年度は、寄贈により、新たに七六件の作品を収蔵することができました。

［日本画］

日本画では、秋野不矩の作品二点をご寄贈いただきました。

静岡出身の秋野不矩については、故郷の天竜川を描いた初期作一点と、インド風景を主題とする円熟期の大作五点をすでに収蔵していますが、今回ご寄贈いただいたのは、これら既収蔵品とは異なる趣の佳品です。

一点は、秋野がインドに赴く以前に描かれた《葡萄》です。角皿の上に載る葡萄を真上から見下ろすもので、葡萄の複雑な紫色と皿の銀色の響き合いや、洗練された構図感覚が見どころです。もう一点の《芥子》は、絵具と金を幾層も重ねて背景を作ったうえで、芥子の花と花瓶を画面いっぱいに描きます。赤茶の色合いや、重厚で力強い画面づくりに、主題としてのインドに出会ったのちの、独特の画趣の萌芽を見ることができます。

（学芸課長　石上充代）

［日本洋画］

日本洋画の新収蔵作品は、版画家・棟方志功の木版画作品三点と水彩画家・石川欽一郎の水彩画一点、計四点のご寄贈をいただきました。

棟方志功は、青森県青森市に生まれました。油彩画を志し、大正一三（一九二四）年に上京。昭和初から木版画に転じ、平塚運一の教えを受けます。その後、昭和三一年、ベネツィア・ビエンナーレで《柳緑花紅頌》などが国際版画大賞となり、世界的評価を確立しました。

今回、ご寄贈いただいた《基督の柵》《谷崎歌々板画柵　花見の柵》《瘋癲老人日記板画柵　颯子の柵》の三点は、すべてシリーズのうちの一点にあたるもので、素朴な作風の中にも、卓越した技法を窺わせる秀逸な作品です。

石川欽一郎は、駿府移住の旧幕臣の子息として静岡に生まれた本県にゆかりの深い水彩画家です。また台湾の洋画壇における優れた指導者としても知られます。

《奥多摩浅川》は、すでに収蔵されている代表作《神域より天の香久山を望む》に黄色を主調とした色彩や素早い筆致が近く、欽一郎晩年の秀作の一つと言えるでしょう。

（上席学芸員　泰井　良）

［現代美術］

現代ジャンルでは、旧清水市（現静岡市）出身の太田正樹氏からのご寄贈により新たに七〇件の作品を収蔵しました。この内四一件を占めるのが、李禹煥の作品です。李は戦後の日本美術において重要な動向である「もの派」をけん引したことで広く知られている韓国生まれの作家です。これまで当館では李の絵画一点を所蔵していましたが、今回の寄贈により昭和五〇（一九七五）～平成

秋野不矩《芥子》

石川欽一郎《奥多摩浅川》

一八（二〇〇六）年の絵画、版画、水彩、ドローイングが収蔵に加わり、李の平面における実践の軌跡を技法を横断して広く見渡すことができるようになりました。このほか、宮島達男の初期デジタルカウンターの作品《Opposite Harmony No.7651/No.26886》、村上隆の絵画で、プラチナ箔の地の上に変現するオリジナル・キャラクターのDOB君が描かれた作品《未知なる次元への旅立ち》、名和晃平の鹿の剥製やガラスビーズを素材とするミクストメディアの作品《PixCell-Deer#47》など一九九〇年代以降の日本の美術を代表する作家の作品が収蔵されました。それとともにアンディ・ウォーホル《ドル記号》、アニッシュ・カプーア《Monochrome（Garnet）》など、当館でこれまで収蔵のなかった同時代の欧米の動向を示す作家の作品も収蔵に加わりました。

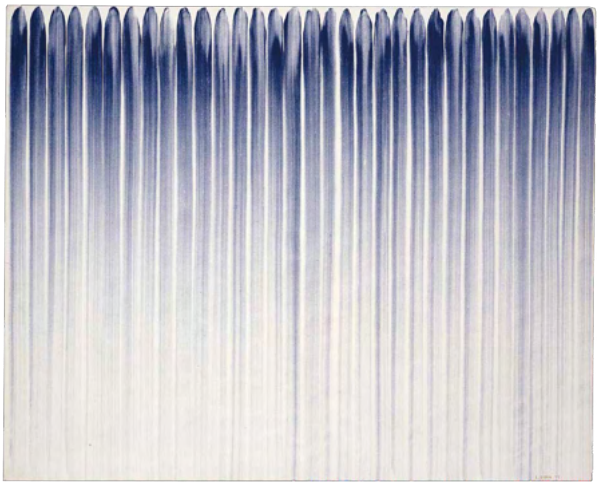
太田氏は平成二〇（二〇〇八）年度以降、継続的に国内外の現代作家の優れた作品を当館にご寄贈くださり、寄贈総数は一〇六件に上ります。四月からの「新収蔵品展」では、新収蔵した七〇件の内、一部を抜粋してご紹介するとともに、五月からの「太田正樹コレクション展」では、地域の美術館を支えたいという故人の意思を顕彰し、全寄贈作品から選りすぐりの作品をご紹介する予定です。

（上席学芸員　川谷承子）

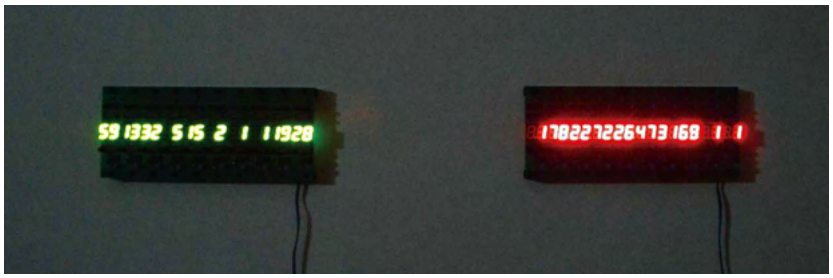
ご寄贈くださった方々（五十音順）
大越久雄氏
太田正樹氏
星戸圭子氏（星戸國男氏旧蔵）
記して謝意を表します。

新収蔵品展
二〇二三年四月一一日（火）～五月二一日（日）
会場　本館第七展示室

太田正樹コレクション展
二〇二三年五月二三日（火）～七月九日（日）
会場　本館第七展示室


李禹煥《線より》1975　©Lee Ufan

村上隆《未知なる次元への旅立ち》
©2016 Takashi Murakami/Kaikai Kiki Co., Ltd. All Rights Reserved.


宮島達男《Opposite Harmony No.7651/No.26886》

名和晃平《PixCell-Deer#47》

アニッシュ・カプーア《Monochrome（Garnet）》

宮脇愛子《作品》と光をめぐる考察

上席学芸員　川谷承子

本稿では当館所蔵の宮脇愛子《作品》（一九六七／一九八六）を取り上げ、展示と写真撮影を通じて考察した同作品の作品性について、おもに光との関係という点から論じる。

作品について

本作品は厚み一七、縦一一九、横一一五センチの立方体のフレームの中に、工場で製造され均一の長さにカットされた真鍮の角柱パイプをグリッド状に集積させた構造をしている。フレームの内側は、パイプで埋め尽くされており、ところどころに周囲のパイプを溶接して出来ている立方体の空間が設けられている。この空に抜けた部分とパイプの内側の穴を通して、作品の向こう側の景色が見えるが、視線を少し動かすと、パイプの枠で視界が妨げられて景色は隠れ、見え方はうつろいやすい。フレームに差し込まれた角柱パイプは固定されておらず、恣意的に手前に引き出したり押し込んだりして、表面に凹凸を作り出すことができる。当館では作品保全の観点から、展示中に鑑賞者が作品に触れる機会を設けてはいないが、作者自身は、鑑賞者も自由にパイプに触れて鑑賞することを想定していた。[1,2] 作品の外側から差し込む光が、立方体の開口部やパイプの内部空間を透過し、光は凹凸する面に反射して光線を屈折させ周囲に光を放つ。作品を見る角度や光のあたり方次第で、錯覚で真鍮の素材が半透明に見えることがあり、その瞬間、重量のある金属性の立体物から実在感が消え、はかなさをみせる。

本作品は当館が開館した一九八六年に、静岡市の田村てる静氏からの寄贈により収蔵品に加わった。一九六七年に制作され、同年ニューヨークのグッゲンハイム美術館の国際彫刻展で買い上げ賞を受賞し、同美術館に収蔵された《Work》（図1）を、一九八六年に再制作したものである。両者を比較すると、空に抜かれた立方体の数と位置に若干の違いがある。現在当館では、安全上の理由により展覧会に出品している時を除いては収蔵庫で保管しているが、筆者が美術館に勤務したばかりの頃は、レストラン横の中庭の風景が見渡せるガラス越しの場所に、常設展示していた（図2）。季節や天気、時刻の移り変わりとともに、光が変化するのに応じて、真鍮が様々な表情を見せていた。改めてその事を思い起こすと、作品と光との関係性をよく理解していた人物が、当時その場所での常設展示に携わっただろうことが推察される。[3]

《作品》と光との関係

筆者が、本作品を光との関係でとらえ、展示や撮影の際に照明を意識するきっかけを与えてくれたのは、二〇一九年に当館で開催した企画展「一九六八年　激動の時代の芸術」の時であった。同展は、千葉市美術館、静岡県立美術館、北九州市立美術館の三館を巡回したが、《作品》は静岡会場でのみ、二章「環境芸術とインターメディア」のコーナーに追加して、山口勝弘の《Sign Pole》や、吉村益信《NEON RING》など蛍光灯や電球が組み込まれた作品と共に展示をした（図3）。同章では、一九六〇年代後半に存在感を示し、「動きや光、音を有する作品や実践によって、建築物の屋内外や観客をも含む環境を可視化する」[4]、「環境芸術」と呼ばれた一九六〇年代後半の作品を集めた。なかでも「絵画＋彫刻＋写真＋デザイン＋建築＋音楽の総合展」という副題を掲げ、宮脇愛子も出品した「空間と環境」展（一九六六年一一月一一日～一六日、会場：東京・銀座松屋、エンバイラメントの会主催）は、日本で「環境芸術」がその後展開していく一つの契機になった。一九五七～一九六六年までロサンゼルス、ミラノ、パリ、ニューヨークに滞在し作家活動を行なっていた宮脇は、帰国して間もなく「空間と環境」に参加したが、同展に参加する一九六六年には真鍮の「作品」シリーズの制作に取り掛かっていた。[5,6]

図1　グッゲンハイム美術館での《Work》の展示風景　1969年5月　宮脇愛子アトリエ提供

図2　宮脇愛子《作品》当館蔵　『静岡県立美術館コレクション110選』静岡県立美術館、1991年、p.158より転載

図3　「1968年　激動の時代の芸術」展
（会期：2019年2月10日～3月24日、会場：静岡県立美術館）展示風景

宮脇は一九五三年から絵画制作をはじめ、一九六〇年代前半には当館所蔵《作品12》にみられるように、大理石の粉を混ぜた油絵具をパレットナイフでパネルにのせて有機的な形を反復していく絵画を制作していた。絵画にみられる厚みのある絵の具の盛り上がりからは宮脇の光と陰影への意識がうかがえるが、立体へとメディアの幅を広げていくのは、まさに一九六六年の「空間と環境」を境にしてのことで、翌年一九六七年に発表した真鍮の「作品」シリーズを契機に、「光」への関心が三次元で展開されていく。

展示と写真撮影を通じての考察

「一九六八年展」で作品の図版を図録に掲載するにあたり、宮脇愛子アトリエの松田昭一氏に連絡を取った。図録に掲載する作品写真として、一九九〇年代に当館で撮影した写真を使用したい旨を申し出たところ、松田氏からは、作家が生前気に入りよく使っていたという別の写真を使用してほしいとのリクエストがあった。当館で撮影し従来使用していた作品写真（図4）と、松田氏に送っていただき展覧会図録に掲載した写真（『アマリリス』132号　表紙）では、作品背後からの光のあたり方に大きな違いがある。松田氏は長らく宮脇の下で展示や設営に関わり、経験的に作家の意図をよく理解している人物である。松田氏には、展示作業にも立ち会っていただいたが、当初筆者が考えていた以上にパイプの凹凸を出すようにとの指示があり、筆者はこの時の展示経験を通じて、作品の可変性と、照明の光により非実在性を表出させる点が本作品のポイントであるという気づきがあった。

その展示の経験を踏まえ、二〇二一年にデジタルアーカイブへの掲載を機に撮影した写真では、作品性が生かされるよう作品の後方から照明あて、ところどころパイプを引き出した状態での撮影を行った（図5）（図6）。

図4　1990年代に当館で撮影した《Work》の画像

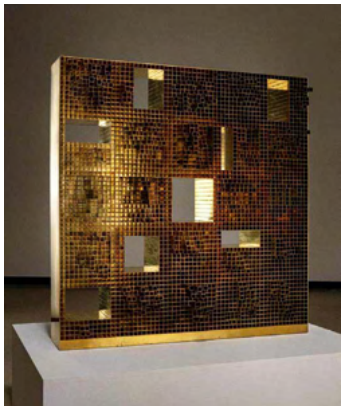


図5　2021年に当館で撮影した《Work》の画像
撮影：表恒匡

図6　2021年に当館で撮影した《Work》の画像（部分）
撮影：表恒匡

1　「限りある中で」（宮脇愛子と星野清一（『現代彫刻』編集長）との対談）『はじめもなく終わりもない―ある彫刻家の軌跡』、一九九一年、岩波書店、一二一頁より以下引用

――固定させない中のパイプを動かすことができるというのは凹凸というものを見せたかったからですか。

宮脇　それもあります。それと、その時その時に自分で自由に変化をつけられる、ということはかなり面白いわけですね。それから自分だけでなく、見る人も自由に動かすことができるし。

2　「グッゲンハイム美術館の展示当初は、アクリルボックスがなく、自由に真鍮パイプの出し入れを観客にさせていたそうです。」松田氏から筆者が二〇一八年に受信したメールより引用

3　同掲書、一二一頁より以下引用

宮脇　それと真鍮の色には微妙な変わり方があるでしょう。光によって真鍮の色がほんとうに不思議なくらい変化するんです。同じ光でも鏡の立方体だったら真鍮のようにはいかないと思います。素材のもつ色というのがあって、それが自然の光や人工の光なんかと触れ合ったとき、まったく、別の光を生み出すわけです。たとえば曙の光というのは紫色なのだけど、徹夜なんかして夜が明けたときに、机の上に置いてある作品に曙の光があたって紫色になっていたりすることがある。不思議な色になるのでびっくりしちゃう。昼間の光ではまた違うし、夕陽を受ければ真赤になる。自然をどんどん取り込んじゃうというところがあるんです。

4　辻泰岳「第六章　百貨店のインターメディアー「空間から環境へ」展（一九六六年）」、『鈍色の戦後―芸術運動と展示空間の歴史』、二〇二一年、水声社、一七五頁

5　PART2［1960→1970s］『宮脇愛子ドキュメント』、一九九二年、美術出版社、五十二頁より以下引用

私は帰国したばかりで、事情は深く飲み込めませんでしたけれども、たまたま山口さんからの紹介で参加したのでした。出品作は、三角形の立体をブルーのグラデュエーション（ママ）で遠近法的に処理したような作品でした。（中略）メタリックな光でグラデュエーションの効果をねらう、光がゆったりと中から出ていくっていうような、その後の作品の光への興味と関心があると思います。そのあと1967年に東京画廊でパイプの個展を開きましたけれども、1966年頃、もうパイプの作品を作ってたんです。

6　「空間と環境」展には、アルミにメラミン塗装された《作品》が出品されている。『美術手帖』臨時増刊号　第275号、一九六六年一一月、美術出版社、一九頁、一一七頁

本の窓

サムエル・ウルマン 著
作山宗久 訳
「青春とは、心の若さである。」より「青春」
角川文庫　平成八年六月二十五日初版

この本は、自分が社会人（およそ三十年前）になるときに父親から渡された本です。

その当時、なぜこの本を渡されたのか正直その意図が分かりませんでした。その最初に掲載されている詩である「青春」の感想は「年を取るとそんな風に考えたくなるのだろうな。」でした。

しかし、社会人になって様々な経験をしていく中で、自分自身の「気」を吸い取られるような思いをしたり、逆に人から与えていただいたりした思い出を見返すと、確かに「青春」とは、年齢のことを指していないと思っています。それは、来館される方々の表情を見れば、明らかに青春を謳歌しているように感じられるからです。

（学芸課　主幹　奥村祐喜）

工事休館を経て

総務課管理班　菅沼元詳

令和五年一月一〇日から二月一三日の約一か月間、当館は工事のため休館をしていました。

館内の空調設備（主にバックヤード）の更新、ロダン館低天井のＬＥＤ照明工事、館内トイレ洋式化等を行いました。

空調設備の更新工事に伴い、総務課も学芸課も執務室で勤務できなくなり、職員皆での引越作業から始まりました。移動先は県民ギャラリーです。休館と同時に荷造りを始め、引越業者に机や棚等、重い物を運んでもらい、執務室を移転しました（写真）。引越前は「県民ギャラリーは広く、空調も工事により停止しているので寒いだろうか。」と危惧しており、暖房や防寒着の準備をしていましたが、実際に引越して勤務してみると、思ったよりは寒いと感じることはなく、快適に勤務できていたのではないかと思います。（私個人の感想なので、他の職員がどのように感じていたかは分かりません。）

県民ギャラリーの様子

工事前は執務室の天井に設置されている空調から頭の上や書類の上に水滴が垂れてきて騒いでいたこともありましたが、今回の工事で快適な執務環境に変わりました。上を見上げると、天井が一部張り替えられているので施行箇所がはっきりと分かります。

ロダン館の低天井のＬＥＤ工事については照明設備が古くなったこともあり、ＬＥＤ照明に更新しました。照明が新しくなり、より良い環境で作品を鑑賞いただけるようになりました。皆様には変化に気付いていただけると思います。

トイレの洋式化については館内の一部が和式トイレだったため、今回の休館中に館内全てのトイレを洋式化する工事を行いました。

全ての工事は順調に完了し、より良い環境へと生まれ変わりました。二月一四日に無事に常設展「光―The Light」が始まり、二月一八日からは企画展「近代の誘惑―日本画の実践」が始まりました。

当館は、開館以来三五年余りの月日が経ちましたが、皆様に快適な環境で美術館をお楽しみいただけるよう整備してまいりますので、ぜひ当館に足をお運びください。

利用案内

開館時間：10:00～17:30（展示室への入室は17:00まで）
休 館 日：毎週月曜日（月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館）
※7月10日（月）～24日（月）、9月19日（火）～10月16日（月）、12月11日（月）～2024年2月9日（金）は工事休館

アクセス

◎ＪＲ「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約６分
◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約３分
◎東名高速道路　静岡IC、清水ICから約25分　日本平久能山スマートICから約15分
◎新東名高速道路　新静岡ICから約25分

ウェブサイト：https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002　静岡市駿河区谷田53-2
企画総務課／Tel 054－263－5755　Fax 054－263－5767
学　芸　課／Tel 054－263－5857　Fax 054－263－5742

静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

2023年度収蔵品展・移動展のご案内

［収蔵品展］新収蔵品展
4月11日（火）～5月21日（日）
太田正樹コレクション展
5月23日（火）～7月9日（日）
美術館のなかの書くこと
7月25日（火）～9月18日（月・祝）
版画でひもとく聖書と神話：デューラーからピカソまで
10月17日（火）～12月10日（日）
天地耕作展（仮）関連企画　静岡の現代美術と1980年代
2024年2月10日（土）～4月7日（日）
［移動美術展］
小山町総合文化会館　9月3日（日）～14日（木）
沼津市民文化センター　9月22日（金）～10月1日（日）

静岡県立美術館　友の会

静岡県立美術館友の会は、「芸術を愛する人々が、会員相互の親睦を深め美術館の活動を後援し、芸術文化の普及を図っていく」という理念のもと、美術館の協力を得て活動しております。
この会は、講演会・講座などの主催や会報の発行・鑑賞会・研修旅行を実施しています。さらに美術館活動への協力・援助を通して、県民１人ひとりに愛され親しまれる美術館となるよう協力しています。
入会手続きの詳しいご案内は友の会事務局まで
〒422-8002　静岡市駿河区谷田53-2
Tel・Fax 054-264-0867
Email tomonokai@spmoa.shizuoka.shizuoka.jp
https://www.kenbi-tomonokai.jp/

特別会員（１口）10,000円
一般会員（１名）5,000円
親子（キッズ）会員（１名）3,000円
シニア会員（70歳以上　１名）2,500円
学生会員（高校、大学、専門学校　１名）1,000円
賛助会員（企業様向けとなります。お問い合わせください。）
プレゼント会員
友の会の「会員証」をプレゼントしませんか？「会員証」を友人や知人に進呈することができます！詳しくは友の会事務局にお問い合せください。

事業委員、会報委員募集中

友の会では各事業の計画、運営、会報誌「プロムナード」の編集を一緒にお手伝いしてくださる方を募集しています。ぜひお気軽にご参加ください。

静岡県立美術館ニュース『アマリリス』No.149　編集発行：静岡県立美術館　2023年4月1日　印刷：文光堂印刷株式会社